

展望

## 被災、原発の歌

金子智佐代

さんぐわつじふいちにあらなくみちのく  
はサングワツジフイチニヂの儘なり

本田一弘『あらがね』

昨年五月発行の第四歌集（二〇一四〜二〇一八年までの四二一首および長歌一首所収）から引いた。視覚と聴覚に訴える象徴的で独

創的な表現に驚くが、平仮名と片仮名をひとつひとつ拾うように読んでゆくと、東日本大震災以後さまざまな不条理を抱え込んだ人々の、痛みや憤り、悲しみが伝わってくる。

震災から八年となる三月、この歌が一段と胸をつく。復興は思うように進まず、廃炉への道筋はあまりに遠い。

集中、本田は原発の災禍にあえぐ郷土福島  
の姿を数多く丁寧ていねいに詠んでいる。

福島に生まれしわれはあらがねの土の産  
んだる言葉を翻ひらふ

あくまでも中間とよぶ保管場へ土の身  
が撤ばれてゆく

復興は進んでるますといふ言葉から漏れ  
つづくCsと水

基地といふつちは要らない沖縄のそらに

つながる福島のそら

証言は詩になりうるか雪空に貼り付く月  
の眼差しが問ふ

歌集名に関わる一首目。「あらがねの」は「土」の枕詞。故郷の土が産んだ言葉、その言葉を育み詠ってゆくという決意を力強く表明する。二首目は除染作業の汚染土、三首目は燃料デブリ冷却で増え続ける汚染水を詠う。第四首は沖縄と福島をつなぐもの、国策に翻弄され続ける地方という構図を示した。

一方で、第五首のような葛藤が生じる。思いも寄らぬ災禍によって、思いも寄らぬ歌を自ら詠うことになった戸惑いもある、困難もある。そんな作者を支えたのは敬愛する二人の先達ではなかったか。集中に、二人へのオマージュのような一首がある。

祐禎さんも竹山さんも生きてゐる ふた  
りの歌集でのひらに載せ

「祐禎さん」は大熊町出身、福島県歌人会の佐藤祐禎（一九二九〜二〇一三年）、「竹山さん」は「心の花」の先輩、竹山広（一九二〇〜二〇一〇年）。

原発が来りて富めるわが町に心貧しくな  
りたる多し 佐藤祐禎『青白き光』  
いつ爆ぜむ青白き光を深く秘め原子炉六  
基の白亜列なる

二〇〇四年発行の第一歌集から引いた。県も町もござって原発推進の時代から、己の信念に従い、危険性を訴え続けた。

人に語るのならねども混葬の火中にひ  
らさゆきしてのひら

竹山広『とこしへの川』

原爆を知れるは広島と長崎にて日本とい  
ふ国にはあらず 『地の世』

一首目は第一歌集から。二首目は第十歌集（遺歌集）の竹山最晩年、九十歳の歌。二十五歳での八月九日の被爆体験を原点として、繰り返し繰り返し原爆を問い続けた。

体験は個々のものであり、その心も個々のものだ。そこに生まれなければ、そのときそこに居なければ、その体験も心もない。二人は体験や心を深化させ、詠い、その歌によって今も多くの読者の心を動かしている。

先達二人の歌集を手のひらに載せ、本田はすでに葛藤から抜け出したようだ。

われわれはわれなりわれがわれわれをう  
たへばわれをうたふ詩になる

『あらがね』